宗像

発行日　毎月十五日
発行所　宗像大社
宗像社会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ③ 1311代
定価　一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店
福岡市博多区東公園二一三一（〒八一三）
電話福岡（〇九二）六五一―九四五六番
京都市京区油小路八条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇三五）三三一―三三一一（代）二四三番
本社
京都（〇三五）三三一―三三一一（代）二四三番
・二〇六番

沖津宮現地大祭

天気晴朗なれど波高くして

去る五月二十七日、沖ノ島に於いて斎行される予定であった現地大祭は当日の強風の為、渡島出来ず、大島沖津宮遥所にて斎行された。

ここに明治三十八年五月二十七日に記された貴重なる日誌があるこれの紹介を以って、当日の沖の島を、日本海海戦を偲んで見たい。

沖津宮日誌より

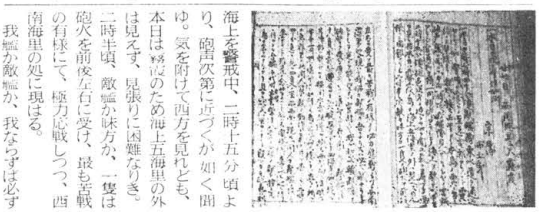
宗像神社沖津宮、主典宗像繁丸

五月二十七日、西風強く暴雨。

一、本日、日供奉仕如例。

一、本日午前七時四十分頃、敵艦隊東水道を通過しものの如し。警戒を要すとの至急電報ありしと、望楼よりの報知に接す。

正午より、本島の西北に当り、砲声盛に聞ゆ。午後一時頃、敵艦隊見をさりしやの電報ありし旨、通知を得、一同視線をこらして、海上を眺めたるに、煙突より煙を吐く艦隊、遠く水平線上に現はれ、次第に近づくが如く感ず。



二時半頃、敵艦か味方か、一隻は砲火を前後左右に受け、最も苦戦の有様にて、極力応戦しつつ、西南海里の処に現はる。

我艦か敵艦か、我なるべきは必ず勝なるべきも、ひとみを定めて能く望めば、豈計らんや、我和泉艦、敵艦の砲撃を受け応戦しつつ退却するにあり。間もなく、敵の艦隊は十八隻、水雷艇を合せて五六隻、忽然として四海里の処に現はる。

其の陣形は整えるも、隊間水雷駆逐を伴ない、西北に向い進航す。余等一同、怒り堪へざるも、如何ともなす能はず。

望楼にては、直に所々に急報せしと、此の間、人員艦の動作に気を附け居りし、二時四十分、忽ち見る、四隻の軍艦、西南に現はる。一同又敵艦の後れて至るならんと、恐らくの急襲する事能はず。遅視すれば、喜ばべし。これ待ちに待ちたる砲撃、千代田、常磐、磐手、八雲の四隻、敵を捜索のために進航する為め。直に砲火は開かれたり。殷々たる砲声は、刻一刻に激を加へ、天柱為に震ひ、地維将に絶んとするが如く、砲煙濛々、海を蔽い、閃光閃々、海岩為に夢を驚かし、加之、強風怒濤、翠々として、海上に怏ゆ。

朝来薄曇にこめられたる海上の光景、益々陰惨の度を高め、其の凄絶壮絶の感を極む。……云々……と日誌は戦況を明確に記し名文で書かれている。又この戦を見た唯一の民間人である当時沖津宮住夫であった故佐藤市五郎翁は、よく……又どおりの四分五裂、艦尾の軍旗はすでに降り、煙突は過熱して海赤い次の色を帯び、沖の黒潮からはどろどろと幽霊でも現われるかおどろしい有様じゃった……。と当時十六才であった頃を思い出し、涙をうかべながら、話されたものである。

この五月二十七日、現地大祭の折々に、故翁をなつかしく思い出すのである。翁が所去された昭和四十九年五月十一日から早くも満六ケ年の月日が流れた。

大島遥拝所にて斎行

沖津宮現地大祭

昭和五十五年度の沖津宮現地大祭は、例祭日の五月二十七日に沖ノ島へ渡島、宗像大社沖津宮本殿に於いて斎行の予定であったが、当日の天候が日本の国運を懸けた「日本海々戦」――明治三十八年五月二十七日対ロシア・バルチック艦隊――の連合艦隊旗「三笠」より発信された「本日天気晴朗なれども波高し」の電文の通り、前日より天気は快晴であったが、風速が海上は大時化（おおしけ）となり翌二十七日も収まらず、已むなく中止決定、急遽、大島の沖津宮遥拝所に祭場を移し、午前七時より斎行（以下二名の祭員、奉仕のもと、河野孝人沖中宮奉献会長外会員多数、入江健三郎前九州大学々長外六十名の一般参拝団員が参列し盛儀裡に斎行された。

本年度の現地大祭は前述の通り中止となったが、一年に一度の大祭に参列することで、念願の沖島―沖ノ島―渡り沖津宮に参拝が叶うため、遠くは関東・関西、北陸からの参拝申し込みがあり、選らばれた六十名の参拝団の方々にとっては誠に残念なことであったが「三年続けては現地へ行けるが、四年目は行けない」と言われるように、丁度、今年が四年目にあたり、一同、改めて「沖ノ島」の神秘さに心打ち、来年こそは是非参拝をと、遥拝所より遥か玄界灘洋上に浮かぶ「神島」へ祈念して散会した。

論説

神跡と結婚祈願

――香椎宮勅使道――

鎮西の名社香椎宮境内には、読み人知らずながら霊域にふさわしい歌碑が見える。

「千早ふる香椎の宮の鰐形は
神のみそきにたてるなりけり」

と刻まれている。神さびた霊妙な感を誘う。

神功皇后と香椎宮の神話は、その敬愛された仲哀天皇の故事も絡んで極めて神秘的である。香椎潟から数丁離れた多々良河口に、同じ皇后ご座船についての神話が伝えられているので、順序として国の天然記念物たる帆柱石について述べる。

河口に突出した巨岩の傍に九個の円柱状の岩列が横たわり、ちょうど船の帆柱を横に倒したように見える。皇后が仲哀天皇に代って三韓外征軍の指揮を執られて凱旋された時に、ご座船の帆柱の化石になったとの伝説からこの名がついたとされている。本当は第三紀層特有の柱状の化石の代表といわれて、六千八百万年前とする大変古いものと言うが、一般の理解は困難である。考古学者科学者の発表でも、黙って信用できるわけにはゆかないのも少くない。

名島には有名な城跡もあるので、この際述べておこう。豊臣秀吉が四国の長曽我部を攻めた時、包囲軍に加わって毛利元就の三男小早川隆景は、その後島津征伐にも従って天正十五年に名島に居た。ここで秀吉の命を受けて名島城を建設し、功に依り初代の城主となって秀吉東遷後も筑前の領主として、その子金吾秀秋と領地を守り、黒田長政の筑前入りまで引退していない。

この城跡も海抜僅かに十五米余ではあるが、風光明眉の展望台をなし、博多湾の全景、福岡の市街地を見渡す眺めはすばらしい。昔から井屋大門と共に唄われてきた。

西鉄バスは、停留所の標識に香椎宮勅使道と明示して、この地名にも古い歴史が偲ばれる。香椎宮参道の国鉄鹿児島本線踏切を渡るとすぐ右手に、市内では最も古い万葉歌碑があって明治二十六年建立となっている。

神亀五年（七二八年）当時太宰府の長官だった大伴旅人らが参拝した時の作として、旅人らの三首が刻まれている。

「いさや子ら香椎の潟に白妙の
袖さえぬれて朝菜つみてむ」

と旅人の名が付けられているのが目を引く。歴史と伝統が、その精神的脈絡を庶民の生活の中に生き続けさせて、今日祈願の目的となっているのが催国不動の信仰である。井財天福神明神は福利招来の祈念に明け暮れ、天満宮は学業入学の受者に賑うも短日月の成果ではない。宇美八幡が安産、筥崎宮が武運、香椎宮が良縁となるとそれ専門的効能の観がある。神仏への人間の祈念の灯は、そんな風にどこでも燃えていればよいのではない。

二十五年も香椎の長きに心酔して住住する作家岩井氏の「香椎々音」と題する短文の中から、その一部を付記して、遊園地の豪華な四季の花を楽しんだ身辺を偲びたい。

干潟でアサリ貝がふんだん獲れていたのである。いや、香椎浜では海水浴もできたのだ。西鉄香椎花園は、今では遊園地と呼ぶのもはばかるほど花の少い遊園地となってしまった。開園当初は花菖蒲やバラの見事なところだった。四季の花が、豪華に咲き競っていたのである。いまは香椎花園の駐車場だが、球場だった頃は、プロ野球の二軍選手が未来のスターを夢見て溌剌と練習に励み、幾多の名選手が巣立って西鉄ライオンズの黄金時代を築いてくれた。

干潟は埋められて全国で有数の大団地となった。道路も整備されてゆく。それにつれて都心まで出かけなくても、たいていの買物をすますことができるようになった。文化施設と福岡女子大学の側に、東市民センターが福岡市の各区の先鞭をつけて、まっ先に設立された。

阿蒙少言

国境のない愛国心の育成、奇異な感を与え勝ちである。平和を説き大人社会の不道徳性を叫ぶ老教育者、その主張に傾聴すべき卓抜性の強いことを喜び、再度熱読、咀嚼する●戦前戦時そして戦後と世相の変の中を、教育の道を貫いたとは、今日平和憲法を守り民主主義教育確立のために、保守的政治制と対抗する若い教育者の主張に、何に肯綮に当る良き意見を述べて、鋭い批判を加えていた●現在の大人社会の大部分は、戦後教育の洗礼を受けた層である。その大人社会の不道徳性は種々の野で、その醜態を露呈している。その不道徳性を環境とし土壌として育つ青少年は、正常な人間性を欠く危機に立たされる当然の宿命を負わされている●愛国心と言う言葉が、日本人の独自の素朴な心を表明してきたのに、国旗日の丸を掲げ国歌君が代を歌えば、直ちに軍国主義ときめつける今日、民主主義の敵と罵る者さえ居る現在、日本人は一体どこの国に生を享けた国柄に育ったのかと、今日のうつましさかな

の手記の一節に戦後、日本人の意識の中で一番変化したものは、愛国心ではなかろうか。いかなる国でも存在し、それが消滅することは、その国が滅びることを意味している。戦前における日本の愛国心とは、自分を殺し国を生かすことで表された。祝日には各家に日章旗を掲げ、国民全員が国の繁栄のために働いた。国民にとって、愛国心は毎日の生活の心支えにさえなっていた」とある。戦前の核心をよく把握している思う●無暗に戦前戦時の愛国心の諸相を攻撃しがり、攻撃することを自由民主の本領と心得ているに見える青年学生の多い中、一応讃意を表したい。日本を永久に真の平和国家にしたいならば、愛国心の自覚が先決である。

（白雲）

第三回　宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

宮田　片山　一

亡き母の衣をつかし縫いなをし明けゆく春に敬じて着る

武丸　原田まつ代

蚕桜のおもむき添えし裏山に椎の若葉のみどり萌いづ

日の里　清原　絹代

眠り足りし一夜なりけりあかつきを有難くいて時に咳出す

須恵　早川　フサ

配流の島流人の島と語られし佐渡の島見し山脈を見し

原町　八波　五月

亡き母にかじられど似て来しと親しげに言う郷の嫁は

福間　二宮　未子

腰痛のたかだければ針灸の熱さこらへ今日も続ける

福岡　吉田　信夫

大いなる神の恵みに生かされて喜寿を迎へし今朝のうれしさ

箱崎　吉村　三郎

合掌の形のごと休みたる庭の白蝶花井に揺れいる

名古屋　野崎　傳三

白妙の卯の花垣に色添えて赤裳ひたてる蘂滴のくれなゐ

曲　天野トモエ

門先に落花の描く花模様あはれみにつつ軽く踏みゆく

田熊　吉田　直志

庭に咲く白き牡丹に春雨のふり注ぐ今日のうつましかな

田久小方　実

還らざる北方領土を無念がる天皇旗手たりしその人も老いて

田久　立花　勇雄

丘畑に土ゆく坂吹きたまる春の落葉はかすかに匂ふ

香椎　桜井　ツ子

父はほの褥で給ひけむが髪は白くなりたり母の齢越えて

津屋崎　内田　久美

うつ縁の亡父は細りて尊とかりいのちの限り神に捧げて

田熊　今村　重刀

新緑をうつして広き溜池の夕闇をうけてさざ波寄する

戸畑　田中ハツセ

雪深き形帳越えれば春のさかりの桜ほころぶ

田熊　驚津かつ代

杉垣を知りある人に声かけて青杉匂ふかたへを過ぎぬ

八幡西　磯谷　緑雨

俵山温泉のまちは渓ふかく霧たちこめて明けおそきかな

鐘崎　村田　四郎

軒のたい湯気はいのぼる湯治場に朝のしじまに下駄の音きゆ

東郷　藤崎　辰子

戻り来て鍵のかかれる裏口に新聞紙を敷きて蜜柑を食ふる

池田　永富　錬

測量器具かたへに置きて湧き出づる清水に交々口寄せて飲む

福岡　林　まつえ

ひい孫に手を取られておきたる朝楽しき命の泉わき出る思い

津屋崎　谷口　礼子

宗像のみやしろ護る出光の佐三の名こそ永久に尊らむ

赤間　白木うめの

うれ麦の風を孕みて泳ぎゐる真鯉緋鯉の尾鰭ふれあふ

津　丸　藤田　肇

紫に棟花咲き空青し二十四番花信風吹き終りたる

田島　吉武　武雄

裏庭に祖父の植えたる八重椿手を招くがに風に揺れおり

深田　中野　節子

蕾だたせ厚く剥く味噌汁の蕪柔かに夫とすする

田熊　力丸　一郎

風そよぎそよぎ麦こころ春雨に海原遠く能古は煙れり

徳重　石松や寿子

緑陰の城代家老にましまし五十君の裔に落葉散りしく

福間　山本　夏枝

野の径にひとつ咲きゐる花大根手袋をぬぎお指もて摑る

宗像　中村　幸

夕まけて萌え落ちたる牡丹の花影を引かれただに平たき

大井　吉田ますみ

桧苗床と植え来し此の山に今二人来ん青葉光るなか

古賀　吉武　邦夫

君が夢久に見しよりさおれは隣り家の鶏は啼きいづる

以下四面の俳句欄につづく

宗像大社研修を終えて

第(20)期 出光店主室教育生一同

三泊四日の宗像大社研修は、日本の伝統とか歴史など「日本人のあり方」を、身を持って感得できて大変有意義なものでした。

私達にとって最初で最後であろう白衣白袴姿での宗像大社研修で感じたことを述べてみたいと思います。

「白衣白袴について」

宗像大社に到着して、まず御本殿にて奉告祭を挙行した後、白衣白袴を四苦八苦して着付けましたが、それも着用すると身も心も引き締り、今までの自分と別人になったような錯覚を覚え、これからの生活に胸をときめかしました。

「神拝作法について」

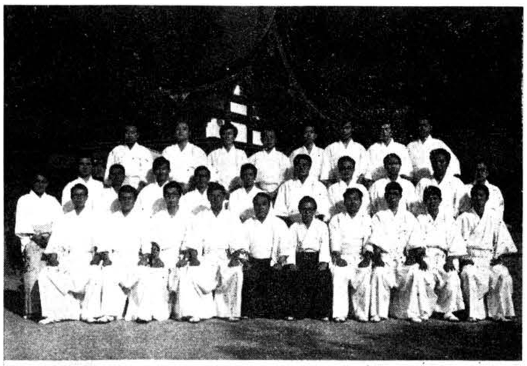
位次、起居、進退、敬礼の区別玉串拝礼作法のどれひとつを取ってみても「きまり」があることに驚きました。ここで身に付けた作法は、今後、私達の日常生活の中で是非活用していきたいと思っております。

「鎮魂について」

話には聞いていましたが、実際に経験してみると足の痺れと痛さは、やはり相当に応えました。しかし、浄闇の中、本殿で神の御前に正座しているという思いが、足の痛さも堪えさせ、眼を静に閉じていると唾を飲み込む音さえ気になるほど静寂そのもので、魂が鎮まる思いがしました。あの時の静けさと厳かさは、今でも鮮かに脳裏に蘇ります。また、今回初めて大祓詞を奏上して、国家鎮護、国体の平和を二千年以上にわたって祈り続けてきた神道のあり方に感嘆し、日本の伝統のすばらしさを改めて認識しました。

「高宮、第二宮、第三宮参拝について」

禊をして白衣白袴を着付けると早朝の境内は益々荘厳に思えました。そして、昼まで清掃しながら高宮、第二宮、第三宮を参拝しましたが、私達が最も印象深かったのは、高宮の祭場です。それは、飾り気が全くなく、素朴で簡素で、しかも清浄に保たれている祭場でした。ここに、古代日本人の心の原点「自然の声を聞き、自然に感謝しつつ、自らも自然と同化して生きようとする心」があるような気がしました。



第20期　店主室教育宗像研修記念　昭和55年4月23日

「神道について」

神道について、今まで私達は、一般の伝道宗教である仏教、キリスト教等と同列的な認識でしかなかった。しかし、朝の禊斎から夜の鎮魂までの生活を通じて、「神道」は、宗教というより日本民族の生き方、生活そのものであるということを感得できたような気がしました。そして、その習わし、行事は私達の日常生活のあらゆる面に活かされていることを知り改めて驚きました。

その他、宝物館見学、中津宮参拝、沖津宮遥拝、そして宗像名物の「カシワのスキ焼」を囲みながら、神職の方々と夜の深けゆくまで語り合ったこと等思い出は尽きませんが、日本の良き伝統、民族性を感得でき、「自分は日本に生まれ、日本人である」という誇りと自信を持ち得たように思います。

最後になりましたが、非常に有意義かつ貴重な四日間を過ごさせて頂いた上に、色々と暖く細かい心遣いをして下さいました葦津宮司様はじめ神職の皆様方に心より感謝致します。本当にありがとうございました。

神戸油槽所
宗像神社鎮座祭

神戸市の出光興産株式会社神戸油槽所において、此度その敷地内に宗像神社が竣功、当大社の御分霊をお鎮め申し上げるべく、去る五月二十日に御鎮座祭が斎行された。

当日午后三時より新殿祭、日没と共に荘厳な道楽の流れる中御鎮祭が又、翌二十一日には御鎮座奉祝祭が、取締役業務部長・伊東文夫、取締役大阪支店長・幸芳二・神戸油槽所々長・藤太助各氏の外関係者多数の参列の下に厳粛裡に斎行された。両日は台風3号の影響により各地に豪雨の被害が聞かれたが、祭典の時には、雨も上がり、大神の御神徳に一同感激した。

同油槽所では、昨年の川崎油槽所同様、基地設備面の拡充、整備を行って来たが、宗像神社の竣功に合せて全施設が完成し、その竣功祭も同時に斎行された。この改造工事完成により、近畿地方のエネルギー供給源として今まで以上に重要な役割を負うこととなり、その使命はより一層のものとなった。宗像神社を参拝される油槽所々員の表情には、油槽所の守護神たる大神の御鎮座により、その御加護を戴き、各自その重き使命に情熱を燃してその務めの遂行を誓いながらも、その姿には何かしら安堵の様子が浮んでいるようであった。

祭典終了後、一新なった設備のテープカット、引き続き所内の見学が行なわれた後、事務所三階広間にて盛大なパーティーが催され参列者一同、宗像神社の御鎮座と改造工事完成の竣功を心から喜びあい、和やかなうちに会を終えた。

親不幸通り

繁華街の一角、安くて親しみ一杯が看板の飲食店が列ぶ裏通りに「親不孝通り」が誕生し、ここに集まる安サラ学生浪人等にとって恰好の巣となっている。親不孝通りの巣窟名は異様だが、滑稽味もあってますます人気を沸かす。それでよい。どうせ高級レスや料亭には無縁の貧乏書生を待つ処である。

話材は宇宙論から筑後川のハゼ釣りのコツまで、種々雑多は親から送ってくる学費の一部が、ビールや安酒に化けての沸騰である。人類が宇宙に出現してから四十六億年になる。科学者の科学的が怪しいとは言っても嘘とは断じない。結局何億年であろうとかまわないことになる。

川辺の砂浜に年期を入れたハゼ釣り屋が、親不孝通りの名つけ親とも思われない。この命名は学費を何年か飲食に使い、落第につぐ落第で浪人をあきらめ、飲み組の先輩の口ききでやっと勤めにありついた二浪連中の先輩格が、名づけたものらしい。親不孝通りでよかろう。孝行者が居よう筈がない。

二宮金次郎などの清潔人は登場する舞台でもないし、若し出現したら通りの名が困る。孝行者は一切ご免である。不孝者ばかり寄り集まるガス灯に、孝行者は異端者扱いになりかねない。

稀に孝行者どころか芸者姿が物ずきに顔を出すこともある。貧乏書生の屯所と知って、はじめからアネゴ振って馳走する気持がある。手練手管で料亭か高級レスで、鼻の下を長くした重役とか課長とかから吐き出させた賄賂かゴマカシ税金では惜しくもない。

親不孝通り常連は、貧乏書生であっても近代の政治家実業家のような悪性はあって欲しくない。清廉二宮翁までゆかなくとも、柄にない知性は顔を出さぬ処に、親不孝通りの本領がある。よいかな、親不孝通り。

知性に富む神々だけでは、よきロマンは綴れないとある詩人が嘯いている。こうなると、親不孝通り常連は懐工合は悪くても株はぐんと上がる。

残筆しがらみ草紙

玄陽隠士 (41)

綿密に調べたわけではないが、勉強嫌いや酒好等は親ゆずりが多かろう。筆者には四男児がある。曲りなりにも大学と名つく卒業で、今は安サラになって勤めているが女児を生まなかったため、四人の嫁が各地から来ている。

親が親だから不孝者も鈍才も似ている。と云っても箸にも棒にもかからぬボンクラも生れなかった。ある縁故坊主が、やっと高校を卒え、某大学に裏門入学した時、担任の先生を仰天させた「高校卒には違いないが、小学校六年生の学力ありや否や怪しい。あれを入れる大学なら授業料が目当てなんだろう」と、慣れっこになったか先生も平気に戻る。

堂々天下にK大学卒業の名乗りを上げる経緯もなく、高の知れた田舎神主、どうにか三宝のあげおろしが出来ればよい。結構なご身分である。馬鹿の一つ覚えだから素朴単純な農漁村では、文句なしに通信する。馬鹿ほどボンクラほど無難で、一日中ぐずぐずたから繁華街まで親不孝の羽は延びない。三宝の上げおろしが無難だけでは嫁の候補も見つからぬ。

農漁村の娘等も女子大短大を出て街の銀行会社に就職して、派手な一面もよく知っている。田舎神主と結婚するなど思いもよらない。真偽の程は極めて怪しい神話時代を引き出して、お家柄でゴマカス妙策を考え出さねばならぬ。お家柄などは落語家の笑話に属する時代である。

百八十度の方向転換など奇蹟に類することながら、それがボンクラの田舎神主に起ったとしたなら、祝杯でも傾けたい喜びである。そして親から小使銭でも巻きあげて、親不孝通りをウロツクなら安心してよい、喜んでよい。

遂に「親不孝通り」はボンクラ君まで引き出したが、あまり秀れていない羽を親に内しょで広げる倅が居るのだから、この辺で矛をおさめるが上策のようだ。

×　×

お知らせ

第二十五回 宗像大社 中津宮七夕揮毫会

一、応募資格　幼稚園々児・小学校児童・中学校生徒

一、課　題　小学校

小学校　幼・一年　なし

二　年　おりひめ

三　年　星まつり

四　年　七色の光

五　年　南十字星

六　年　書の神様

中学校一年　銀河鉄道（楷書）

二年　湖水白鳥（行書）

三年　山姿雄大（行書）

一、申込〆切日　七月十日(木)

一、申込先　宗像郡大島村

宗像大社中津宮

七夕揮毫会係

一、参加料　参百円（一人）

一、席上揮毫日　七月二十四日（水曜日）

一、会　場　大島小・中学校

昭和五十五年度 夏越祭・大祓神事

拝啓、暑さも日毎に厳しさを増してまいりました。

扨て、当大社の夏越の人形大祓神事を左記によりとり行います。

この人形大祓神事とは、毎日の生活の中で知らず知らずのうちにおかした罪や、けがれを祓い除いて新たな清々しい気持で、日々の生活を安らかに御過しになられますよう願いをこめた大切なお祭りであります。

皆様に御送り致しました紅白の人形にそれぞれ息を吹きかけ、初穂料をそえられ、七月三十一日迄に到着するようお送り下さい。

尚、都合のつきます方は、紅白の人形をお持ちになり、お祭りに御参列下さいますよう、御案内申し上げます。

六月吉日

宗像大社宮司　葦津嘉之

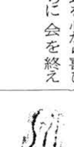
崇敬者各位

記

一、七月三十一日

午後五時　大祓神事

夏越祭



神の湊（こうのみなと）(96)

楠早鳥 作

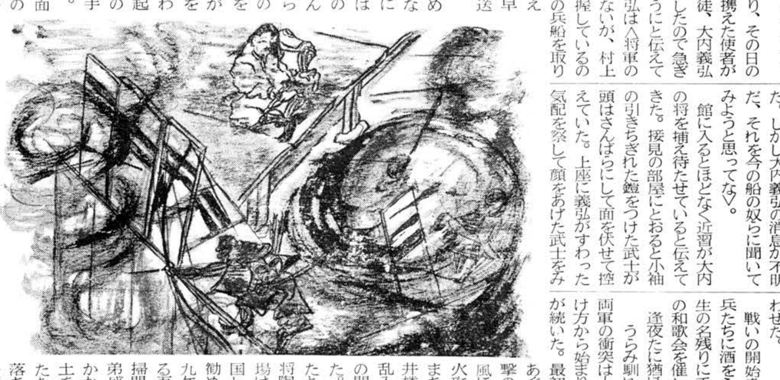
福田長庵 画

図南（その一）

予期していたとおり、その日の夕刻将軍の御教書を携えた使者が村上館を訪れた。凶徒、大内義弘が堺において乱を起したので急ぎ討伐の軍に加わるようにと伝えてきた。それに対し義弘は〈将軍の下知に叛くわけではないが、村上は瀬戸内の要衝を掌握しているので堺に往復する大内の兵船を取り締る心算、左様お伝え願いたい〉と言い、早舟を仕立てて使者を送り返した。

〈馬鹿な戦さのために一兵も損じたくはない〉吐き捨てるように言う義弘を見て明継は部下にたいする情愛の深さを測り目がうるんだ。その日は物見から連絡はなかった。堺のこと大内義弘の心中を想い眠りの浅い一夜が明けかかった頃、急を報らせる銅鑼が響きわたった。臥床の上に起ち上った明継は寝眼の女人がわたす刀を片手に把み櫓まで走った。物見の者が指さす海面を見わたすと、濃霧のなかから大内の兵船が一艘また一艘現れては西の海に消えて行く。櫓からそれを眺めていた義弘が〈殿りの船を捕獲せよ〉と命令を与えた。少し間をおいて大内の兵船が一艘、島の前を通過する時、十艘あまりの村上の船が漕ぎだして半数は前路をふさぎ、半数は退路を遮断した。とうてい櫓まで声は聞こえぬが双方で声高に怒鳴りあう感じだけはする。やがて大内の船を真中におき円陣を組んだ船隊は島に向けて移動を開始した。〈おりて話を聞くか〉義弘がうながして二人は館へ向かった。道々義弘の話を聞けば、〈堺の海上にだしている物見の船からの報告によると昨夜半は陥ちたらしい、かなり離れた海上から真赤に焼ける空が見えたということだ。しかし大内義弘の消息が不明だ、それを今の船の奴らに聞いてみようと思ってな〉。

館に入るとほどなく近習が大内の将を捕え待たせていると伝えてきた。接見の部屋にとおると小袖の引きちぎれた鎧をつけた武士が頭はさんばらにして面を伏せて控えていた。上座に義弘がすわった気配を察して顔をあげた武士をみて明継は驚いた。森田掃門である。〈知り合いか〉義弘の問いに手短に応え、堺の模様を尋ねた。血しぶきがまだ固くかたまっている蒼白な顔をあげて掃門は語った―絶海中津の上洛の勧告を退けた大内義弘は堺を城寨都市にすべく数百人の大工を督励し井楼四十八、櫓千七百を構築した。これによって堺の二十町四方は蟻の巣のように固められた。絶海の返事を聞き激怒した将軍義満は凶徒退治の軍をただちに発向させた。まず京極・赤松・細川など八千騎を先発させ、義満は二千余騎に身を守らせながら、諸国から集った三万余騎をひきいて大内軍の立てこもる堺にむかってきた。堺は人と旗で埋まるかと思いましたと掃門は声を震るわせた。



戦いの開始を前にして、義弘は兵たちに酒をふるまい、自分は今生の名残りに千句の連歌会、百首の和歌会を催した。

逢夜たに猶ほしやらぬ我袖や
うらみ馴れにし泪なるらん

両軍の衝突は十一月二十九日の明け方から始まり終日激しい攻防戦が続いた。最初の日は幕軍も攻めあぐねたが翌日の総攻撃のとき、折からの強風につけこんだ幕軍の火攻めで、城内はたちまち炎につつまれた。井楼・櫓は焼けおちて乱入した幕軍と城兵との間に死闘が展開された。大勢は一挙に決したようである。大内の将陶弘長は義弘にこの場は逃れて船により帰国し再起をはかるよう勧めたが、全身に二十九ケ所も傷を負うている吾が身をかえりみて掃門を呼び山口にいる弟盛見に「堺の敗戦にかかわらず、大内の領土を守るように」としたためた遺書をもたせ落ちのびさせた。―話を聞きおわって明継は目頭をおさえた。

大内義弘享年四十四才、十六才の時から二十八度の合戦にあけくれ、九州探題に協力し九州鎮圧に尽し、山名討伐のさいの内野合戦、また南北両朝合体への功績、この間に九州では弟の満弘、また内野では次弟の弘正を討死させおびただしい犠牲をはらって将軍家につくした仕打がこれかと思うと、義弘の無念さがわかった。

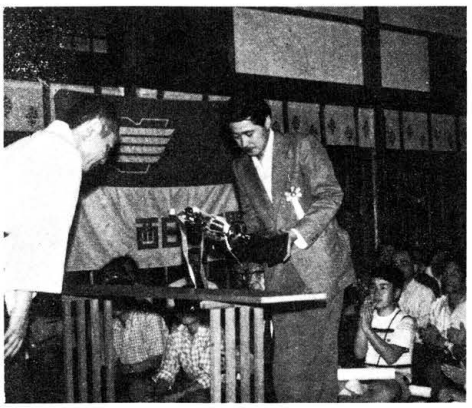
空が蔭り部屋がうす暗くなった季節はずれの雷鳴が次第に近ずいてくる。明継にはそれが大内義弘の慟哭の声のように聞えた。突然掃門がつっ臥して嗚咽の声をあげた。明継はその背后に、あくことなき中央集権に怨念をもやす将軍義満の黒い野望をみた。

第三回 宗像王将戦終る

宗像大社、西日本新聞社主催の宗像王将戦は、去る五月二十五日（日）快晴の天候に恵まれて当社境内、清明殿に於て盛大に開催された。

宗像王将戦は今年で三年目、アマ棋士九州一決定戦とあって、年々その声価を高めている。

前日の二十四日午後より関係者が次々に参集、夕刻五時三十分から宗像王将戦奉告祭が当社新願殿で執り行われた。今年の審判長来賓代表の平山選手と長崎県代表河内選手との間で争われた。この対局は平山選手先番で始められ、角交換の後、両者棒銀で激しい攻め将棋となったが、一二〇手で河西選手に凱歌があがった。



【二】方、清明殿広間には、名物となった大盤解説を楽しみに二百名の将棋ファンが詰めかけ、米長王位が、決勝戦の局面をさやかに説明、「さてこの局面ではどちらが優勢だと思われますか」等ファンに問題を投げかけ、一手に対する変化を解説し、差し方によって攻守処をかえる局面が出現したりして大鈔のファンを魅了した。

出場選手次の通り

篠原信行、大住盛一郎（福岡南）三崎　厳、増水幹保（福岡北）平山真治、田中勝久（佐賀県）河西文郎、田中　稔（長崎県）松下和広、安部　勇（熊本県）大石　清、安部正美（大分県）守田富作、白坂敏博（宮崎県）仙田孝一（鹿児島県）仙田、三崎、河西の四選手が準決勝戦へ駒を進めた。決勝戦は佐賀長王位も名人戦の間隙を縫って出席、各県代表選手十五名、大会運営関係者二十数名が参列して祈りを奉げた。祭典終了後斎館に於て一同会食、斎泊した。

翌二十五日、午前八時半から当社清明殿に於て試合が開始されたトーナメント方式、持ち時間四十分で秒読みに追われる熱戦となり第一回戦で、松下、平山、大石、仙田、安部、三崎、守田、河西の八選手が勝ち、二回戦で、平山、西選手との間で争われた。この対局は平山選手先番で始められ、角交換の後、両者棒銀で激しい攻め将棋となったが、一二〇手で河西選手に凱歌があがった。

【二】方、清明殿広間には、名物となった大盤解説を楽しみに二百名の将棋ファンが詰めかけ、米長王位が、決勝戦の局面をさやかに説明、「さてこの局面ではどちらが優勢だと思われますか」等ファンに問題を投げかけ、一手に対する変化を解説し、差し方によって攻守処をかえる局面が出現したりして大鈔のファンを魅了した。

出場選手次の通り

篠原信行、大住盛一郎（福岡南）三崎　厳、増水幹保（福岡北）平山真治、田中勝久（佐賀県）河西文郎、田中　稔（長崎県）松下和広、安部　勇（熊本県）大石　清、安部正美（大分県）守田富作、白坂敏博（宮崎県）仙田孝一（鹿児島県）

賑うちびっ子王将戦

ちびっ子王将戦は、今年で二回目、昨年に倍する小中学生百六十名の豆将士が参加、会場の運営にあたった大学生も豆将士の対戦、整理に大童であった。

午前十時から対戦が始まり、六十五面の盤上には熱気が立ち込め、三勝者二十三名にチビッ子王将位、勝者五十六名に敢闘賞、その他参加者全員に参加賞が手渡された。

米長王位は、ちびっ子等に必ず初段になれる方法として対局には正座して姿勢を正すこと新聞の将棋欄の指し終り区を見て翌日の一手を考え、それが十に一つでも当る様になればもう初段になれると易しい語り口で話しかけ日頃わんぱくちびっ子達も神妙に聞入っていた。

石井忠氏（文化財管理事務局嘱託）第一回樋口賞受賞

今年の正月ごろ石井さんから「福間の今川海岸を歩きよったら、水死体を見付けたぞ、一一〇番したらパトカーがようけ走って来よる。娘は横で震えている」と息せききった声が飛びこみ、パトカーのサイレンの音を交えて電話は切れた。

漁師は流仏（水死体）を拾うと大漁に恵まれるといいエビスと称えて縁起を祝うという。

その日の夕方、石井家を訪れると「今年は春からエンギがええか悪いか解らんが鬼に角えらい物を拾うた」と意気消沈の有様である。しかし漁師の言い伝えは適中した。五月初旬のある日「俺、樋口賞をもらうことになったぜ」と電話がかかった「樋口賞たあ何だ？」と問うと、国学院大学の樋口清之博士が昨三月定年退官されるに当り考古学博物館学の新進の研究奨励を目的として基金を国学院大学に寄贈せられ設けられた賞であるとのこと。

受賞対象は石井さんの「玄海灘沿岸の漂着物の研究」ひろげたハラソルのふちと呼ばれる志賀島から宮崎に至る五〇粁の海岸線を古賀養護学校で教鞭をとるかたわら歩き続け対馬暖流が運ぶ漂着物を採集し、更に南西諸島、能登越前海岸、房総半島にまで調査の域をひろめ、その成果は西日本新聞社刊「漂着物の博物誌」として発表された。

石井さんは元来国学院大学で考古学を専攻した学徒である。今川遺跡の発見、浜宮貝塚の調査は斯界で名高く、また第二沢神ノ島調査に参加している。

考古学的手法を漂流物に応用し民俗学に新分野を拓いたこの研究はまことに第一回の樋口賞を飾るにふさわしいものがある。

六月二日受賞をおえて帰った石井さんから電話があった「日暮て道遠しの思いだ」冗談をいうなら今からがあったばかりだ！今後の御精進を祈る

第10回「県青年の船」訪中体験記

力丸洋子

山市の男紙、祖剛、絹織物、夢幻人民公社、教育施設など感激の連続でした。そのどこを訪問しても「你好」と気持の良い笑顔で私達を迎えてくれるし、その時の心のふれ合いは何ともいえないうれしいものです。それぞれの人達は、自分の仕事に誇りを持ち四つの現代化に向って一生懸命に打ち込んでいる意欲的な目の輝きをしています。そして、休みの時間を見つけては机の中から日本語の本を取り出し学んでいるそうです。

また中山大学の学生にしても、私を掴まえては、自分の学力をためそうと必死になって英語を話しかけて来ました。でも英語のためなお私はおどおどするばかりで、まさか中国で英語を必要とするほど思いもよりませんでした。

またこのように一生懸命自分の道を進むためには、幼児のころからの知育、徳育、体育の徹底のすばらしさがあります。私達が訪問した第一幼稚園では、一週間のうち五日間、子供を幼稚園に預けるという週制でした。子供を自分のそばから離し、共同生活をさせることで親からの独立心を養うって居ります。

これからもどうぞおみちびき下さいませ。

先づは御礼まで

宗像郡福間町緑町四三八

福田　美栄子

母　雪子

そうです。その間両親は労働に励むそうです。

ところで船内生活で一番印象深いのは、甲板磨きです。半分に割ったやしの実に力を加えてゴッシゴッシ。板からは洗剤の黒い泡が出てくるし、したに足がだるくなります。でも皆で励まし合い、歌を歌う中で、連帯感が生まれてきました。

最後にこの二週間協同生活をする中で自分をみつめ直すいい機会を持てたし、導く離れてふるとのよさ、親のありがたさをつくづく感じました。そして多くの人とのこのすばらしい出会いを大切にしてゆきたいと思います。そしてこの尊い体験をこれからの人生に役立てたいと思います。

神楽（かぐら）

今日、残っている状態から見ると、宮廷（宮座）を中心とするもの、神宮・神社を中心とするもの、及び民間の講社などを中心とするものが宗教的な色彩を帯びて伝承されている。宮廷を中心として伝承されているものは特に御神楽（みかぐら）と称し、神宮・神社を中心とするものを社家神楽ということもあるが、その他を含めて里神楽（さとかぐら）と称し、御神楽と区別した。

ずっと時代が降ってからは、特に「ひなびた」とか、「田舎くさい」とかいうような意味で里神楽と呼ぶこともあり、東日本でいう太々神楽（だいだいかぐら）の名称も、これと同様に内容や形式などとは関係のない俗称である。

内容に関係のある例としては、雲神楽・石見神楽・津軽神楽・平戸神楽などと称するものもある。そして例えば石見神楽と称せられるものを、現地では神楽舞とか単に舞とかいわれる。

このほか地域別に伊勢神楽・出雲（島根）などと称せられるものまで、実質的に神楽である点に至っては、これまた複雑といわなければならない。

それほど神楽は包括的な名称となっているが、もとは「神遊び」という総称のもとに含まれていた各種の神楽芸能の一つであった。それが平安時代の中ごろから特に宮廷で栄えたため、かえって神楽という名称のもとに統一されたのである。したがって神楽の歴史的にいえば、みな別々の起源と名称とを持っていたものと考えられる。

神楽の研究は、名称・奉仕者・設備・時季・次第・所作・とり物・服装はやし・楽器などに分けて行われなければならないが、名称だけでも述べたように複雑で、これを純一に分類することはできない。内容的に見ても、明治維新以後は神道要素だけを残そうとする傾向が強かったが、修験道も陰陽道（おんみょうどう）の影響を全く失ってしまってはいない。しかし前にも述べたように、呪術的ないし宗教的な色彩がうすくなって余興なし見せ物がかってきたことは否定できない。

今日「神楽をあげる」ということは、余興として奉納するかのごとく考えられているが、「まつりをする」という意味につかっている地方も残っている。「神楽」とは神事そのものと考えられているからで、その奉仕者も神楽師だけでなく部落民全体であった。今でも部落民が神楽師と一緒になって囃したり、或は舞い踊ったりすることもあるほど、神楽の巡行性が神所が後っている。もともと彼等は決して見物人ではなかったにもかかわらず、神楽の余興化すると共に、奉仕者の大部分が見物化してしまったわけである。

例えば備中神楽は実質的には神代神楽であるが、現在の神楽師だけでなく、現在の神楽師の固定したものと考えられるほど、神楽の巡行性が神所が後っている。もともと彼等は決して見物人ではなかったにもかかわらず、神楽の余興化すると共に、奉仕者の大部分が見物化してしまったわけである。

例えば備中神楽は実質的には神代神楽であるが、現在の神楽師だけでなく部落民全体であった。今でも部落民が神楽師と一緒になって囃したり、或は舞い踊ったりすることもあるほど、神楽の巡行性が神所が後っている。もともと彼等は決して見物人ではなかったにもかかわらず、神楽の余興化すると共に、奉仕者の大部分が見物化してしまったわけである。

相を呈するに至った。しかし本質的に最も重要なのは、花まつりなどに漂く見える「視の力による復活」の精神が、どの程度に残っているかということである。

信仰

互関連的な変化もあった。例えば伊勢神楽は師の薫下によって各地に伝えられると共に、各地在来の神楽からも影響をうけたらしい。もともと宮廷の神楽も、祝福のため各地から参入した楽人団の持つ神楽の固定したものと考えられるほど、神楽の巡行性が神所が後っている。もともと彼等は決して見物人ではなかったにもかかわらず、神楽の余興化すると共に、奉仕者の大部分が見物化してしまったわけである。

例えば備中神楽は実質的には神代神楽であるが、現在の神楽師だけでなく部落民全体であった。今でも部落民が神楽師と一緒になって囃したり、或は舞い踊ったりすることもあるほど、神楽の巡行性が神所が後っている。もともと彼等は決して見物人ではなかったにもかかわらず、神楽の余興化すると共に、奉仕者の大部分が見物化してしまったわけである。

相を呈するに至った。しかし本質的に最も重要なのは、花まつりなどに漂く見える「視の力による復活」の精神が、どの程度に残っているかということである。

第二回玄洋旗争奪戦創道大会

玄小少剣（A）二連勝成す

連休に入り、初めて初夏らしい好天に恵まれた四月二十九日の天皇誕生日の祝日に、宗像町河東小学校体育館に於いて第二回玄洋旗争奪少年剣道大会が行なわれた。

この大会は、青少年の健全なる心身の育成と仲間づくりを目的に開かれており、宗像、粕屋の郡内から、小学生の部二十四チーム、中学生の部十八チームが参加している。

午前九時半すぎ、試合が始まるころ館内には、剣道教室の横幕がかけられ、試合に入るとさすがに日頃の練習成果を発揮し、スピード感あふれる動きで、メーン、コテ、ドウー、とわざをきめ小学生とは思えない試合ぶりで、付き添ってきて応援する保護者たちの声援で熱気に包まれていた。

玄海少年剣士たちも、一二回戦は激戦し、手に汗をにぎる場面も見られたが、三回戦以後は、宗像大社の宇部宮先生並びに木藤先生の日頃指導される基本を守り安定した戦いぶりを見せ二連勝の座を射止めた。

◆団体戦
優勝　玄海少年剣道部（A）
二位　庄剣友会（古賀町）
三位　玄海少年剣道部（B）
三位　十生館（古賀町）
◆個人戦
優勝　高向新太郎（玄少剣）
二位　今村　光臣（十生館）
三位　早川　衛（池野剣）
三位　仁部　正弘（若菜会）

【中学生の部】
◆団体戦
優勝　中央中学校剣道部
二位　玄辰館（古賀町）
三位　玄海剣道教室
三位　玄海中学校剣道部
◆個人戦
優勝　井上　直哉（玄海中）
二位　坂本　清美（中央中）
三位　木藤　伸宏（河東剣）
三位　今永　直樹（東郷剣）

―M記―

今回は異種試合（剣道対なぎなた）が行われ、又玄洋福岡ライオンズクラブから賞品が寄贈され本大会に花を添えていただき喜の内に閉じた。

成績次のとおり

【小学生の部】

〔お便り〕

先日、四月二十九日の天皇誕生日の佳き日に、娘、美栄子、宗像大社の奨学生としてお招きをいただき、おごそかに奉告祭を執り行って頂き、世の中の役に立つ立派な人間になるようにとのお言葉をいただきまして有難たうございました。

思いかけず子供と一緒に直会もいただき勿体ない事でございました。心から御礼申し上げ、神様の御心を有難たくいただき、これからの高校生活を頑張るよう話し合

鬼編雑記帳

●六月、一年に一度の楽しみな職員旅行を明日に迎えた或朝、S巡査、親和会の新参会計のさんに曰く、「いつ出るのですか」「早くしないと名入予算との関係があるんですよ」Oさん、ポケ！何んの事かわからない。H巡査、こんどは印カン、通帳持参で、勝手に誤判、出すのか、出さぬのか、Oさんこまで来れば理解出来た。前年度まで出ていた個人助成金。しかし今年は諸物価値上り、このささやかな親和会旅行も算面で大打ぎを受け、今年もの取消し理由を汗だくで説明するOさん、ごあわれ、聞いていたT両巡査、プイと立って曰く「よし今度の選挙に本気で考えるワ」……世の代議士先生ほんとうにたのみますよ今日も選挙カーは行く

宗像大社歌会 俳句作品集（二〇九）

藤沢　玄洋子
長雨のあがりて今朝の青葉かな

田熊　安部　ゆき
風薫る門の状受け娘の便り

久留米　入江　柳江
庭に佇つ喜びもありつゝじ燃え

名古屋　野崎　傳三
犬小舎の犬も留守なる義元忌

田熊　力丸　一郎
早苗伸ぶ余生の日日の落つかず

田島　吉武　武雄
朱に染む手もだしたくて蛇苺

宗像　吉田　衿子
三人の男の子に端午の空奮し

宗像郡考古学散歩

今川遺跡 (1)

（津屋崎町宮司）その[illegible]　いしいただし

考古学の記事が新聞の一面を飾ることは少なかったが、ここ数年トップを飾る大発見が多い。

ざっと記憶しているものだけでも、高松塚古墳、稲荷山剣々、板付縄文人足跡、太安万呂墓誌、佐賀の銅鐸鋳型、そして七九年暮れに、わが宗像郡の津屋崎町今川遺跡の名が、全国に知れわたった。

弥生時代前期初頭の遺跡から青銅鏃が発掘され、青銅器出現の年代を約一世紀もさかのぼるという大発見である。

私が今川遺跡を発見したのは七三年十一月であった。貝採集に夢中になっていた頃である。

その時は福間浜から津屋崎浜を歩いた。今川付近の砂浜に無数の土器片が打ちあげられていた。赤褐色の土器片は、そのどれもが表面が波に洗われこすれ、中に混じている砂粒が浮き出ていた。

弥生式土器が多くみられたが、他に縄文式土器片もあった。その時、多数の土器片を採集したが、一つだけ文様のあるものを見つけた。縦に二本、横に三本の沈線がある弥生前期の壺の口縁部である。私はその土器片を友人の中原志外顕氏（日本考古学協会員）のところへ持っていった。

「海に土器、近くに川、その川を遡れば、遺跡があるちゃなかろうか、こんな土器が出てくる遺跡なんて面白かバイ」。彼の目がキラリと光った。早速、次の日曜日、中原氏と今川をさかのぼった。海岸から近くに丘陵がある。

今川は蛇行して、丘陵を抉り、崩れた土砂の中や、断面に土器片を包含していた。

「ここばい」、私達は更に丘陵の断面にへばりつきながら、遺跡の中心部を捜した。シダやクズにおおわれた中に、一ケ所だけ水が染み込んで土砂が抉られたところがあり、そこに縄文晩期の夜臼（ゆうす）式土器が推積していた。私と彼は歓声をあげた。

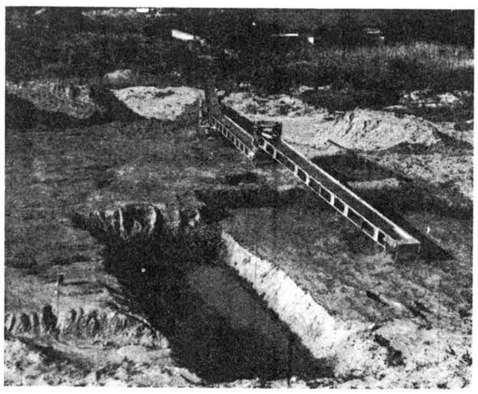
今川遺跡については「福岡県遺跡等分布地図・宗像郡編」福岡県教育委員会刊・七七年、では製鉄遺跡とある。七九年刊の宗像沖ノ島では私の報告が記載され、同書の「宗像地方古代遺跡地名表」では包含層として、縄文土器、石器、凹石、弥生土器、備考に夜臼式土器となっている。

その後遺跡には九大の下条氏や岡山大の春成氏も見学に訪れ、遺跡の重要性を指摘されていた。ところが七九年夏頃から丘陵を覆っていた砂を採り、更に遺跡全体が破壊寸前の状態となり、大きく新聞でも報道されるようになって、県文化課の緊急調査が行われた。

遺跡からはV字溝、多数の夜臼・板付I式の包含層、そして先述した青銅鏃・正確には有茎両翼銅鏃が発掘されたのである。今川遺跡は今年（八〇年）四月末から再度県文化課によって発掘調査が行われている。

さて今川遺跡周辺をもう少し歩いて見よう。津屋崎町と福間町との町境に、今川と云う川幅五メートルほどの小さな川が玄界灘へ注いでいる。

（七月号へつづく）



第二二七回 宗像大社歌会詠草

武丸　立石ろせ乃
就職に進学に子の三人を送り出したる娘の顔の寂しげ

田島　楠　理
トラクターにて麦後を鋤く嫁の無事を思いつ畦草を切る

田島　吉武　俊次
曽孫はよちよち歩きと便りあり吾も負けじとリハベり励まん

鐘崎民俗誌　その二十三

楠本　記

海女（あま）漁（その一）

漁業のなかで最も古く、単純なのは潜水漁法である。魏志倭人伝をみても「今、倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え―」とあるように三世紀頃の倭人は潜水漁法によって魚やあわびを捕っていた。漁民は古くは「海士」「海女」「海人」「白水郎」などと書きいずれも「あま」と呼んでいた。あまは漁を行なう人、即ち潜水漁法をする人ということである。

これほど古い歴史をもっている漁法であるので、今日でもあま漁を営んでいる浦は全国に数多い。なかでもとりわけ鐘崎のあまは有名である。鐘崎あまが有名になった最大の原因はその旺盛な行動力にある。永禄年間、筑前国鐘崎の海士又兵衛に率いられ三[illegible]に乗ったあまたちが能登半島の羽咋（はぐい）郡、鳳至郡の海岸であわび捕りをして寛永年間に藩主前田利常侯から輪島崎の土地一〇〇〇歩を賜り舳倉島の漁業権を得て以後代々あま漁を営み、今日の輪島あまの先祖になった話はよく知られている。

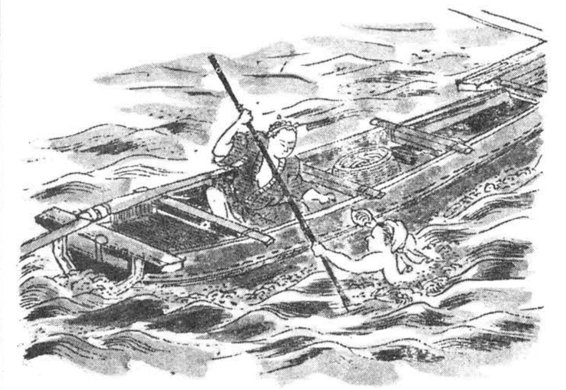
また対馬の曲浦のあまは少弐氏を対馬に運んだ鐘崎のあまが祖先であるといい、山口県の大浦のあまも先祖は鐘崎であるとしている。

伊藤彰氏（註一）は鐘崎海人の菩提寺である泉福寺の過去帳を詳細に調査し明暦元年（一六五五）から幕末に至る二百十三年間の殆の足跡をたどることにより、鐘崎あまの季節移動として

東行ルート（本州島北岸ルート）
北行ルート（対馬ルート）
西行ルート（五島ルート）

があることを発表した。

鐘崎あまについて、歴史的にみた研究は数多いがその習俗を調査したものはあまりない。管見にすぎぬが筑紫豊氏、桜田勝徳氏、瀬川清子氏の著書のなかにあらわれる程度である。現在、鐘崎の海女漁はほとんど行なわれていない。



そこで明治二十年、三十年代生れの人の話を主に聞いてみた。おそらくこの記録が鐘崎あまに関するものとしては最後のものになろうと思われたので二ケ年ばかりを費して可能なかぎり正確に採集したつもりである。

聞き書をしるす前に明治年間の筑前の海女に関する記録（私の調査と比較すると鐘崎海女の記録であると思われる）を掲載して参考に供することとする。

福岡県漁業誌（明治十一年編）

石決明海女漁

漁業ノ季節ハ大暑ノ頃ニ始メ寒露ノ頃ニ終ル漁場ハ五尋乃至九尋位ニテ海底岩石多キ所タリ漁船一艘船頭一人海女二人又ハ三人乗組ミ昼間出漁ス海女ハ各裸体トナリ褌帯ヲ着シ腰ニ藁帯ヲ装ツ右腰ニ石決明売ヲ狭ミ左腰ニ鉄箆ヲ狭ミ各自適宜ノ海底ニ泳キ入リ（老練ノ海女ニテ九尋ハ泳キ入ルヲ極度トス）岩石ニ吸着シタル石決明ヲ見認メ左腰ニ狭ミタル鉄箆ヲ以テ横ヨリ突キ起シ得テ海面ニ浮ブ一回毎ニ一貝ヲ得ルハ上漁ナリ若シ一回ニテ捕獲シ得サルカ又ハ貝ノ群集スル所エハ石腰ニ狭ミタル石決明売ヲ裏向キニ残シ置キ海面ニ出テ気ヲ養ヒ而テ再ヒ海中ニ入リテ貝売ノ光耀ヲ目標トシテ其所ニ至リ捕獲ス夫レ海女水入中ハ船頭ハ海中ヲ直視シ海女ノ所在ヲ案シ海面ニ出ントスルトキハ四尋位ノ竹棹ヲ海中ニ入レ海女ヲシテ棹ニヨラシム而テ海女数回海中ニ入リタルトキハ身体寒冷ナルヲ以テ船中ニ火ヲ焚キ体ヲ暖メシメテ后チ海中ニ入ラシム若シ其度ヲ失スルトキハ海中ニテ気絶スルコトアリ其形状ハ一旦海面ニ出ントスルノ状アリテ再ヒ海底へ沈溺ス故ニ如斯トキハ船頭直ニ海中に入リ之ヲ救ヒ体ヲ暖メ蘇生セシムルヲ要ス

日本水産捕採誌第七（註二）

筑前地方ノ鮑漁法

筑前地方に於ける潜水鮑捕りも亦婦人の業とすれども前者三重県のものと其趣を異にする所あり今其異なる所を記さんに漁場の深さは五尋乃至九尋にして老練なる潜婦も九尋泳ぎ入るを極度とす使用する所の具は長さ一尺一寸幅七分許にして総て鉄にて作り其一端三寸五分許の間を上に反らし別に柄を設けず漁法は船一艘に男子一人船頭となり潜婦二人又は三人を載せ随意に出漁す其潜没するに臨み腰に藁帯を装ひ―中略―右の腰に鮑の貝殻を狭み左の腰に鉄箆を挿みて泳ぎ入る一沈毎に貝一枚を得之を手にして浮ぶを常とするが故に別に綱[illegible]を帯びず若し一回にて捕獲し得ざるか又は貝の群集する処へは右の腰に狭みたる鮑殻を取り之を裏向にして残し置き海面に出て気を養ひ而して復た海中に入り鮑殻の光輝を目標として其処に至り捕獲す其身体の冷るに及んでは船中に火を焚き煖を取りて後復た潜入す其潜婦の浮ばんとするとき男子は竹竿を下し之に縁らしめ浮上を扶くるが如きは前者志摩国の方法に同じ。

―◇―◇―

（註一）新日本教育図書刊「えとのす」一九七五・二―鐘崎海人の移動

（註二）日本水産捕採誌は、明治初期農商務省水産局が全国の漁具漁法を調査し集大成したもので明治十九年（一八八六）より二十八年まで編纂が行なわれ四十三年に発行された。

宝の蔵から

―文化財保護について―

文化財保護ということがよくいわれる。歴史的遺産たる文化財を守ろうというのだが、それは我々にとって如何なる意義を持つのだろうか。

開発か保護かといった二者択一の論議の中で、文化財保護は正義の味方宜しく登場する言葉である。失なわれゆく人類の文化遺産を守ることは現代人の義務であるとは思うが、同時に文化財をセンチメンタルな懐古趣味の玩弄物にしてしまう危惧を感じる。モノを残せばそれで安心というのは、怠惰な魂の自慰行為である。

時の流れが止まらない限り歴史的遺産は増え続け、漫然と残すことだけの保護を続ければ、我々は過去の遺物の中に埋没してしまう。現在は過去の為にあるのではない。我々の「生」を模索する手掛りが過去からの遺産であり、それを守るために保護が図られるべきである。

しかし、文化財は所詮モノである。モノの存否に振回されて、保護を力説したところで、保存すること自体に限界がある。滅びゆくならばそのことをこそ見つめる冷静な目を養うよう、我々はもっと自覚的に努力する必要があろう。滅ぶということは結果的には無であっても、生あるものの動きとしてとらえることができる。現存するモノだけが価値を持つのではない。時として滅んでしまったモノが、雄弁になることもある。

闇雲な保護は、かえって文化財の死蔵を招きかねない。モノがなければ何もできないという怠惰な魂の甘えを許さず、我々に与えられた有形・無形の「過去」を真摯な思索の手掛りとせねばならない。モノに恵まれたお蔵にいると、つい甘えが出るが、それでも世間の声高な文化財保護のかけ声が、何やら気になる。

大島捕鯨資料　その十

脊美ハ定尺ニ満タズト雖モ座頭長須定尺ノ例ニ依ル但シ脊美ニシテ定尺以上ニ及ブモノハ弐割ヲ増給ス

前記載スルモノノ外□□功労ノ軽重ヲ調査シ賞ヲ行フ

明治十八年一月　大島捕鯨商社

一鯨肉配分法如左

壱尺角二切　五寸角壱切　ホガイ弐切　赤身五十斤　波座士
児袋半分　首巻赤身半分　上目　弐切五寸角壱切　魚切
黒皮五斤　赤身拾五斤　銃手
揖取水夫中工　赤身四拾斤

以上

一鯨肉配分法如左

仲津宮献備　黒皮十斤赤身弐十斤
蛭子宮献備　同断
和田須美宮献備　同断
荒船宮献備　同断
黒皮五斤赤身十斤
医師　黒皮五斤赤身十五斤
諸役員　黒皮四十斤赤身六十斤
鑑定派出員　黒皮十斤赤身弐十斤
別当　黒皮八斤赤身十五斤
社長　黒皮十斤赤身三十斤
幹事　同断
会計係　同断
書記　同断
量掛　黒皮五斤赤身十斤
株主　黒皮十斤赤身三十斤
其日山見番人　赤身弐十斤
地島□山見番人　黒皮七斤赤身十五斤
事務所宿　黒皮五斤赤身十五斤
事務所　赤身十五斤
地島山見番　宿　赤身弐十斤
地島村役員　赤身弐十斤
事務所用　黒皮五十斤赤身弐百斤

以上

一持双船水夫左ノ五名十八年第二月五日ヨリ月給金弐円ト米三斗ニテ雇入ル事人名左ノ如シ

長太郎　治助　幸介
増次郎　国吉

以上

―◇―◇―

大島捕鯨会社の記録は以上である。これによっても明らかなように漁獲が全くなく会社設立後数年をまたずして解散している。解散の記録はないが明治二十一年十二月十二日の福岡日日新聞に大島村の中村清三郎氏の努力により捕鯨会社が設立せられる旨の記事があり、十二月十五日の紙上には「玄洋捕鯨会社・同社にて器械も調ひ昨日県庁より許可されたる趣きなるか社長には神湊村永島三之允―中略―理事には大島村の中村清三等の諸氏が就任し近々船卸式を行ふよしなり」と掲載されているところからみて、大島捕鯨会社は明治二十一年の初頭には解散していることがわかる。

また大島村郵便局長の河野幸人氏から祖父にあたられる幸作氏がこの会社の役員をしていた辞令をみせて頂いた。

證
河野幸作
公擯ニヨリ支配方
申談候事
玄洋捕鯨会社
明治二十一年十二月

川野幸作
本社支配方ニ推撰ス会計主任指揮並事務ニ従事スヘシ
玄洋捕鯨会社長
石松三次郎
明治廿三年五月廿三日

玄洋捕鯨会社はやがて株式組織をとり明治二十四年頃には「大島捕鯨株式会社」と称している。

筑豊沿海史によれば「往昔、佐賀県、小川村平右衛門なるもの、当地に鯨網を布きしことあり、その後、明治二十一年より、二十五年に亘りて、またこの網を始めたるも、失敗に終りて廃絶せり」とあるのが多分、玄洋捕鯨会社・大島捕鯨株式会社であろう。

筑前大島の銃殺捕鯨については佐賀県立博物館刊「西海のくじらとり」に詳しい。

次号より江戸時代寛政年間の捕鯨資料を掲載する。